

お届けしたい「声」がある



▲「仲間の支えには、本当に感謝している」と南さん

奈 良県桜井市にある老舗の酒店。南幸永(44歳・敷島大教会ようほく)は、夫婦で営む店の仕事の合間を縫ってひのきしんに励む。

「音訳と出合ってから、以前とは別世界にいるような感じ。家でも店でも笑顔が増えた」

ひのきしんへ向かう車中、発声や早口言葉を練習する朗らかな声が響く。

5年前、もともと殻に閉じこもりがちな自身の性格に思い悩んだ。

「いまからでも遅くはない。一步を踏み出さなければ……」

“ママ友”でもある教友から音訳ひのきしんの誘いを受けたのは、そのころ。新しい場所や集まりに顔を出すには「勇気がいった」。

テープの発送の手伝いから始め、勧められるまま音訳の講習会を受講。自分のことを知ってもらおうと、周囲に過去の悩みを包み隠さず打ち明けた。

一方で「本当に、ここにいていいのかな？」と漠然とした不安が常に付きまとっていた。

「ここが自分の居場所という確信が持てなかった」

背中を押し続けたのは、仲間の声かけと笑顔だった。

「ひのきしんに来ると、必ず誰かの笑顔に出合える」

気持ちが前向きになると、ものの見方が変わった。

労力や時間を惜しまず、時には言葉の意味一つをめぐって意見を戦わせることもある“先輩ひのきしん者”たち。

「初めは『どうして、そこまでこだわるのか……』』と置いていたけれど、いまでは、その気持ちが分かる」

年2回、店の繁忙期に1カ月ほどひのきしんを休む。復帰の際には、音訳や人付き合いへの不安がぶり返すことも多かったが、今年は違った。

1月末、久しぶりにマイクに向かったとき「私の声を待っていてくださる方がいる」と、聞き手の存在を確かに感じた。

「まだまだ、自分のことで精いっぱい。でも将来は、聞き手に気持ちよく聞いてもらえるような音訳者になりたい」

そう声を弾ませると、満面に笑みが広がった。

(文中、敬称略)